

登録コード	L2964500		開講年度	2026			
担当教員	人文学部学務委員 他			副担当	人文学部国際交流委員会・SPREADBURY ASH LEIGH		
授業科目	異文化間コミュニケーション論Ⅱ						
英文授業名	Intercultural Communication Ⅱ						
授業タイトル							
単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	木曜・3時限
講義室	人文401演習室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	
信大コンピテンシー	非該当						
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素			⇔	【授業の達成目標】		
	2022Lカリ, 2021Lカリ, 2020Lカリ						
	【2022年度以前カリ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力			⇔	異文化間コミュニケーションの座学, ケーススタディ, 実践を通してコミュニケーション行動の特性をよりよく理解できるようになる		
	【2022年度以前カリ対象】過去の英知の批判的継承のうえに立って創造的な未来を切り拓く開拓力			⇔	異文化間コミュニケーションを一つの学問として捉え、その基礎概念と理論を学び、応用できるようになる		
	【2022年度以前カリ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多角的に判断することができる受容力			⇔	異文化の他者のコミュニケーションの特性をよりよく理解し、受け入れられるようになる		
	【2022年度以前カリ対象】他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー			⇔	他国の学生と協力して適切な情報を収集し、自らの考えを発信できるようになる		
	【2022年度以前カリ対象】グローバル社会において、多様な文化を理解し、自らの文化を発信できる外国語能力			⇔	他国の学生と協力して課題を成し遂げることができるようになる		
	2026Lカリ, 2025Lカリ, 2024Lカリ						
	【2023年度以降カリ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】			⇔	異文化間コミュニケーションを一つの学問として捉え、その基礎概念と理論を学び、応用できるようになる		
	【2023年度以降カリ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】			⇔	他国の学生と協力して適切な情報を収集し、自らの考えを発信できるようになる		
【2023年度以降カリ対象】専門的学力を基盤とし、持続可能な社会を実現するための課題に取り組む力が身についている。【開拓力・企画発想能力】			⇔	他国の学生と協力して課題を成し遂げることができるようになる			
授業で学べる「テーマ」	多文化協働						
全学横断特別教育プログラム							
授業の概要	本科目は異文化間コミュニケーションの「実践」と「理論」を兼ねている。「実践」に関しては、台湾の輔仁大学とのCOIL型授業を中心としている。台湾の学生を含めた少人数のグループで協力してプレゼンテーションを準備していただく。そのため、授業外でもCOILの課題に取り組み、積極的にグループでコミュニケーションを取ることが求められる（台湾の学生とは主に英語でコミュニケーションを取ることになる）。 また、「理論」に関しては、異文化間コミュニケーションの基本的な概念・理論を学び、「留学」や「旅行」など身近なケーススタディの考察と通して理解を深める。						
授業計画	※下記を計画は暫定的である。輔仁大学と日程を合わせる必要があるため適宜調整し、受講者に知らせる予定である。 第1回 COIL型授業（国際共修）①：オリエンテーション 第2回 テーマについて考える 第3回 COIL型授業（国際共修）②：台湾の大学生と知り合う 第4回 COIL型授業（国際共修）③：グループでテーマについて話し合う 第5回 異文化間コミュニケーションの理論的基盤 第6回 COIL型授業（国際共修）④：最終プレゼンテーション 第7回 COIL型授業（国際共修）⑤：ふりかえり 第8回 コミュニケーションの慣習とミスコミュニケーション 第9回 文化としての言語 第10回 カルチャーショックと適応のプロセス 第11回 ケーススタディ①：海外旅行 第12回 ケーススタディ②：海外留学 第13回 ケーススタディ③：日本在住外国人 第14回 ケーススタディ④：帰国日本人 第15回 期末まとめ、授業アンケート						
成績評価の方法	成績は以下の4項目で評価される： 1. 授業参加（ディスカッション、態度）：25% 2. COIL型授業への取り組み：25% 3. 最終プレゼンテーション：25% 4. COIL型授業に関する振り返り：25%						

成績評価の基準	「やや上にある」： 授業内で示された異文化間コミュニケーションの理論について不足なく理解している。グループワーク・国際共修に参加している。 「かなり上にある」： 授業内で示された異文化間コミュニケーションの理論について不足なく理解し、自ら関連する問題を発見できている。グループワーク・国際共修に積極的に参加している。 「卓越している」： 授業内で示された異文化間コミュニケーションの理論について不足なく理解し、自ら関連する問題を発見した上で、授業内で提示された知識を応用することができている。グループワーク・国際共修に積極的に参加している。
事前事後学習の内容	最終プレゼンテーションに向けて積極的にグループと話し合いを重ね、情報を集め、資料を準備する。第10回以降、事前学習としてケーススタディを事前に予習し、事後学習として内容を整理し関連する問題を考える。
履修上の注意	COILでは主に英語を使うことになることはご了承ください。（英語力そのもの（文法、語彙の用法など）は成績評価の項目ではありません。この科目においては、英語は単なるツールで、通じればよいです。）
質問、相談への対応	メール（spreadbury[アットマーク]shinshu-u.ac.jp）にて質問・相談を受け付けます。
教科書	久米昭元・長谷川典子(2007)『ケースで学ぶ異文化コミュニケーションー誤解・失敗・すれ違い』有斐閣
参考書	石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人(2013)『はじめて学ぶ異文化コミュニケーションー多文化共生と平和構築に向けて』有斐閣